

捕獲の担い手の育成

兵庫県立大学／兵庫県森林動物研究センター
坂田宏志

担い手の確保 ー何が問題か？ー

- 量の確保？ 質の確保？ 選択肢の確保？
- 役割や技術の問題
 - ーどのような役割や技術が必要なのか？
- 募集や待遇の問題
 - ーどのような条件で募集し、応募者がいないのか？
- 個人的な対応 → 組織的な安全性や効率の確保、後継者育成が必要
 - ー組織運営の費用は見込んでいるか？

課題の本質をとらえる

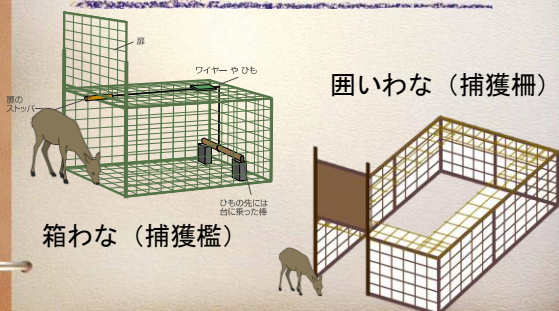
- 本当の課題は何か？
 - ー数ではなくて捕獲できる技術のある人？
- 課題は、人か？ 技術か？ 体制か？
 - ー全体的な技術の向上
 - ー多頭捕獲、被害防止との連携
 - ー殺処分、死体の処理
 - ー後継者育成
 - ー事業量や捕獲量の確保

わな捕獲の現状

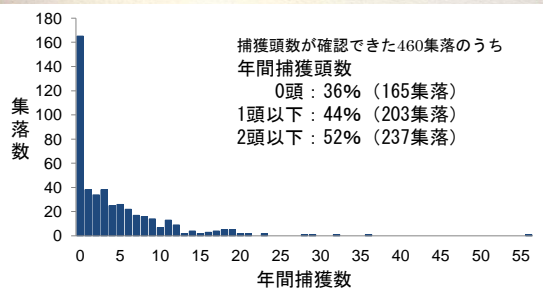
- わなの免許所持者は増加している。
 - ーわなの免許所持者は増加
平成10年 968人 → 平成24年 2,607人
- わなの導入数も増加している。
 - ー集落に配置されているわなは3165基以上
(平成24年度時点、森林動物研究センターで確認できたもの)
- 捕獲の体制は、捕獲班に依頼、捕獲班と集落で協力、集落主体など。

(兵庫県の例)

一般的なえさ捕獲わな



集落に設置された箱わな・囲いわなの捕獲状況



捕獲班ヒアリングから明らかになったこと

捕獲班が抱える課題

項目	捕獲班数
労力不足	19
集落の理解・協力不足	10
獲物が見つからない	3
捕獲技術の不足	2
わなの不足	1
最終処理場がない	1
その他	2

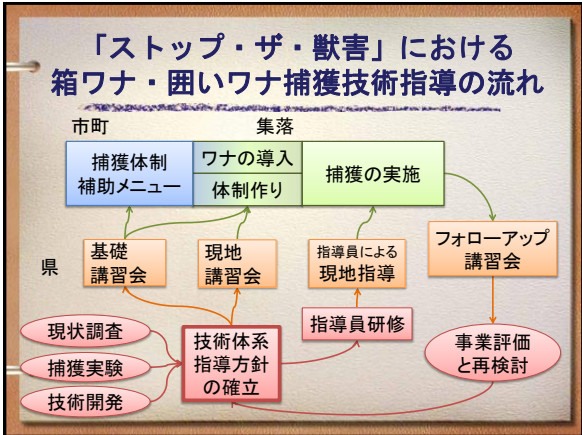
32捕獲班の回答(複数回答)

集落の協力があれば捕獲効率が上がる作業

32捕獲班の回答(複数回答)

多くの捕獲班が労力不足で、集落の協力を必要とし、集落の捕獲技術への理解を求めている。

一方で、集落側も、どのような協力が良いのかわからない。



箱ワナ捕獲の流れ

- 場所を決める
新しい情報が決め手
- 餌付けで誘引
毎日見回り新鮮な餌を
- 餌付けを続けて警戒心を解く
- 捕獲する

- シカ・イノシシは、毎日来るので、じっくりと。
- アライグマは、すぐ捕獲。

指導員による巡回指導・随時相談対応で多くの課題が解決できた

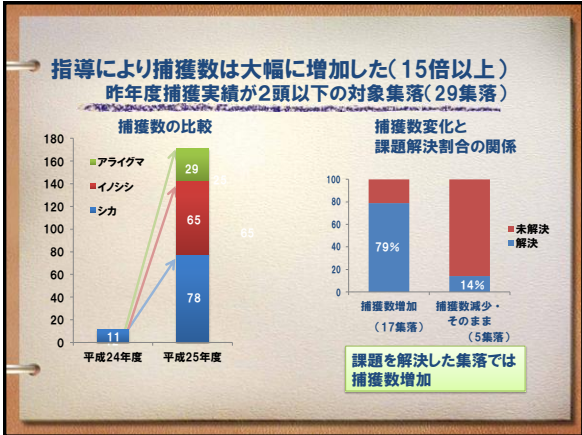
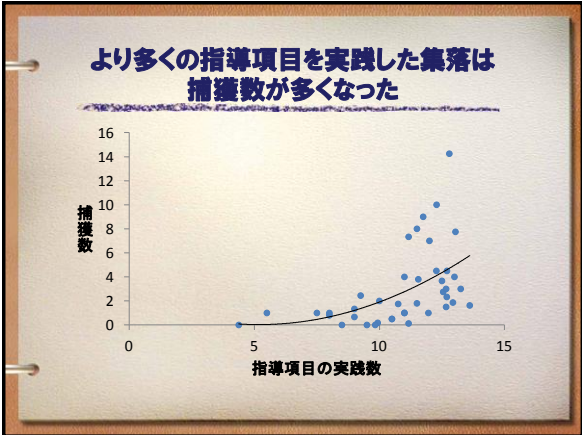
未解決 18%

課題解決 82%

項目ごの実施率

項目	指導前	指導後
誘導するようなまき方	45%	78%
落としの予行演習	61%	84%
警戒を解いて落としセット	25%	45%
餌を常に確保	70%	90%
落としの高さ・位置の工夫	42%	61%
食いつきを確認	36%	55%

51集落への巡回指導・随時相談対応
見つかった改善点 219件 → 計356回の指導
その結果、181件が改善できた。



継続的な支援の成果(但馬地域)

集落当たりの捕獲効率

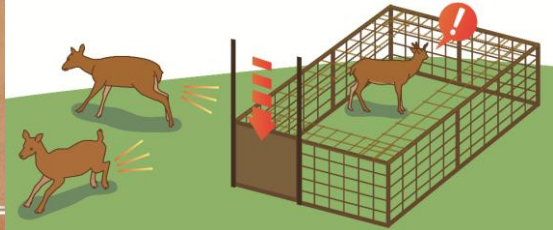
講習会参加	シカ	イノシシ	合計
H23のみ(44)	4.80	2.91	7.70
H24のみ(46)	4.35	3.76	8.11
H25のみ(20)	5.55	3.30	8.85
複数年(53)	5.32	4.08	9.40
参加なし(311)	2.57	1.85	4.41

総捕獲数

参加の有無	集落数	捕獲頭数
あり	168集落	1387頭
なし	312集落	1374頭

困いな捕獲の課題 1

多くとりたいが1頭でも稼働してしまう

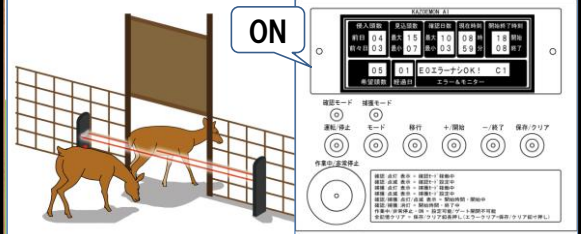


困いなによる1回あたりのシカ・イノシシの捕獲頭数



(2007-2009年度 兵庫県内の捕獲データより集計)

同時多頭捕獲に向けた捕獲支援技術



・遠隔で監視しながら捕獲するシステム

↓
・それを自動化するプログラムを組み込んだシステム

「遠隔監視操作」による捕獲



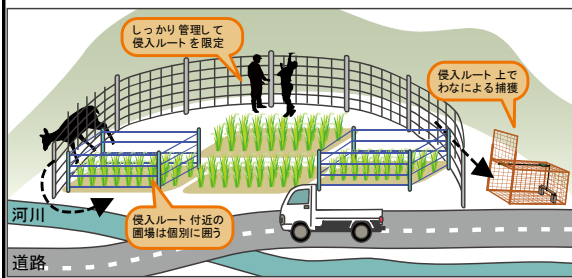
課題

- ・待機監視の負担が大きい
- 進入報知システムの導入
- ・設置場所が制約される

「AIゲート」による捕獲(イノシシ)



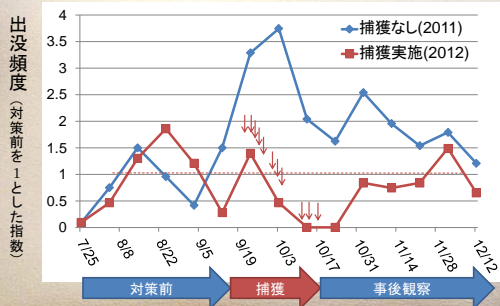
集落柵と個別柵と捕獲わなの連携



集落柵の開口部の侵入対策



【集落柵開口部の侵入対策】 捕獲による侵入の抑制効果



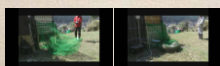
集落柵の開口部の侵入対策

- 光や音、超音波などでは防げない。
- 柵の延長にも限度がある。
- 侵入部周辺での捕獲で、侵入を抑えることができる。
- 捕獲をやめると、再び侵入し始めた。
(柵の山側には、まだシカが残っていた。)
(捕獲を徹底すれば、長期的な効果を期待できる。)
- 必要な労力は、ワナ設置、捕獲時の処理、見回りと餌撒き(毎日1時間程度)。

囲いわなの殺処分

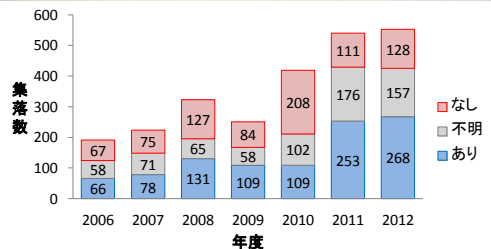


→ポケットネットから出して、保定してから、とめ刺しを行う



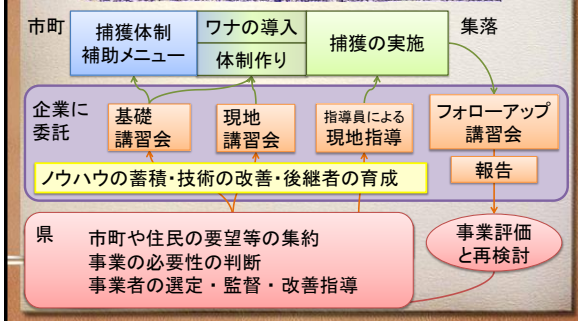
【危険を伴いますのでご注意ください。】
森林動物研究センターから適切な使用法や安全管理等について、情報提供・研修します。お問い合わせください。

捕獲の効果に対する農業集落の見解



- 捕獲効果の評価は、事業の拡充とともに高まった。
- 最終目標の達成度とともに、個別の対策を評価しておくことが必要。

捕獲技術指導の改善とアウトソーシング



アウトソーシングのメリット

- 必要な量の指導や作業を委託できる
- 多様なサービス形態が可能
 - 土日、夜間のサービス
 - 一部受益者負担でのサービス提供 など
- よりよい技術や事業者を選択できる
- 事業として成り立てば、後継者育成や拡大再生産が可能
- 将来的に、捕獲自体の担い手としても期待できる。

地域全体での捕獲推進にあたって

- 役割分担
 - 住民ができること、やるべきこと
 - 技術者に依頼すべきこと、必要な報酬。
 - 行政がやるべきこと
 誰もが、筋違いのことはできないし、能力以上のことはできない、経済的な裏付けも必要
- それぞれの役割に応じた計画や方法の理解 (↑適切な説明)
- 作業の記録、分析、次の意思決定

担い手の確保 ー何が問題か？ー

- 量の確保？ 質の確保？ 選択肢の確保？
- 役割や技術の問題
 - どのような役割や技術が必要なのか？
- 募集や待遇の問題
 - どのような条件で募集し、応募者がいないのか？
- 個人的な対応 → 組織的な安全性や効率の確保、後継者育成が必要
 - 組織運営の費用は見込んでいるか？

課題の本質をとらえる

- 本当の課題は何か？
 - 数ではなくて捕獲できる技術のある人？
- 課題は、人か？ 技術か？ 体制か？
 - 全体的な技術の向上 → 人、経験、体制
 - 多頭捕獲、殺処分 → 技術
 - 被害防止との連携 → 技術、経験
 - 後継者育成 → 体制
 - 事業量や捕獲量の確保 → データ、経験、体制